



年輪を刻んで、

新しい今が輝いて。

蒲生太鼓踊りの歴史



鹿児島県姶良市教育委員会



姶良市
AIKAWA CITY

8/21公開

一、蒲生太鼓踊りの由来

現在、太鼓踊りは、鹿兒島県内各地で踊られてい
るが、その仕様は様々である。始良市内の加治木・
始良・蒲生の旧三町に継承されている太鼓踊りは、
踊り方と同様に同じ由来をもつといわれる。

その起源は、島津義弘が江戸の徳川家康のもとに
伺候したとき駿河の念仏踊りを見て、家臣に踊りを
習得させて帰郷したものといわれる。また一説には
朝鮮出兵の帰途、五島で稽古をさせたもので、以前
は五島踊りと称した文献も残っていたという。

義弘は、太鼓踊りは流行病を鎮める効験があり、
踊りの勇壮さが士気を鼓舞するのに適切であるとし
て征韓の凱旋踊りにしたいと考えていた。この踊り
を習得した家臣が、義弘の意をくんで、山田の士民
に教えて、慶長十三年（一六〇八）に、加治木館の東
北大樹寺で踊らせたのが最初といわれる。やがて隣
村の加治木西別府に伝わり、その後、帖佐・重富・
蒲生・溝辺などに伝えられていったものとされる。

明治初年来、蒲生にあっては、郷内八ヶ村で太鼓
踊りが行われ、旧暦七月二十一日（現八月二十一日）
に蒲生八幡神社へ奉納されていた。なお、この日は
義弘の命日にあたり、その弔踊りとの説もある。

これまで、北・下久徳・川東の三地区で太鼓踊り
保存会を設け、毎年八月二十一日に公開してきた。
また、昭和六十三年七月十八日には、当時の浩宮殿
下（現・皇太子殿下）が御来蒲の折り、町役場にて三
地区保存会合同の太鼓踊りを御覧に供している。

そして、合併三年目の平成二十四年、旧始良町か
ら春花太鼓踊り保存会も参加して、四保存会合同で
太鼓踊り公開を実現するに至った。

二、蒲生太鼓踊りの構成と扮装

蒲生の三地区保存会においては、構成と扮装の仕
様に若干の違いがあるが、主に次のようである。

【ホタ振り】

総指揮者である。浴衣に角帯と脚絆を付け、黒足
袋にワラジを履く。右手に扇子、左手に采配を持つ。
この扇子と采配の先に鉦や太鼓の音を引き付けなが
ら踊りに調和を保つため、鉦や太鼓には練達の者が
あたる。

【鉦打ち】

四人が決まりであるが、五く六人の場合もある。
陣羽織・陣笠・太刀一本・印籠を付け、脚絆・黒足
袋にワラジを履く。左手に鉦、右手に撞木を持つ。

【太鼓打ち】

二十数人の踊り手が、月の輪のついた兜を冠り、
毛頭（白馬の鬣）をつける。矢旗を背負い、白襦袢に
脚絆をあてる。現在は白足袋を履くが、古くは裸足
であった。胸に太鼓を抱え、長い太刀一本を締める。

三、蒲生太鼓踊りの踊り方

【道太鼓】（ミツデゴ）

明治期、太鼓踊りが公開される日は、早朝に八幡
通り塩入戸に集合し、先着順に道太鼓を踊りながら
八幡神社へと向かうものであった。当時は八ヶ村が
競争的にその技を見せ合ったものという。しかし、
今日では、辻通りの下手に集合して、三地区保存会
が年次的に披露順を交替しながら踊られてきた。

各保存会ごとにホタ振りを先頭に、中央に鉦
打ちが横一く二列に並ぶ。その両側には太鼓打ちが
縦列となり、頭太鼓三名が後攻めとして進行する。

【案内太鼓】(アンネデコ)

道太鼓で八幡神社に到着すると、その年の披露順に従い奉納踊りが行われる。その前に、境内前にて庭踊り開始の合図となる寄せ太鼓として、テンポを早めた案内太鼓が踊られる。

【庭踊り】(ニワオドイ)

案内太鼓が終わると、先隊から順に保存会ごとの庭踊りを披露する。踊り手の総勢が境内に集合し、ホタ振りと鉦打ちが中央に並び、社前を正面にした周囲には、左右前方に頭太鼓三名を置いて、残りの太鼓打ちが半円形状になり境内いっぱいになる。

「一仕切」庭入りの楽から頭太鼓三名が駆け出して庭踊りとなる。ホタ振りと鉦打ちは左回り、太鼓打ちは右回りに進む。鉦打ちは「向かえの土手に」と歌いつつ、ホタ振りの後方から鉦を打つ。太鼓打ちは鉦の調子に合わせて、此方彼方に跳ねながら楽を調和して踊る。

「二仕切」打ち出しで、次に頭太鼓三名が駆け出して庭踊りとなる。鉦打ちは「殿の御門に」と歌いながら進行し、唄の後半に頭鉦の二番手が入鉦を演ずる。

「三仕切」打ち出しで、一番仕切の頭太鼓三名が駆け出して庭踊りとなる。鉦打ちは「吉野の桜」と歌いながら進行し、唄の後半に頭鉦の二番手が入鉦を演ずる。

三仕切が終わると、最初の隊形となり引庭踊りとなる。各保存会は、この引庭踊りが最終演技として全力を投じて華々しく演じ最後を仕切る。庭踊りが終わると、休憩を挟み、町内各所を踊り歩きながら各集落に帰り、庭戻しを踊り行事の全てを終える。

四、蒲生太鼓踊りの唄

庭踊りの唄には、各太鼓踊り保存会ごとに歌詞の異なる部分もあるが、音符と踊り方は同じである。

*北地区太鼓踊り保存会

「一仕切」向かえの土手に 鳴くスズ虫は 恋しさに鳴くか 悲しさに鳴くか 朝草切りの様 目をさます

「二仕切」殿の御門に うずらがくける 何とくけるか 立ち寄り聞けば 御大は永かれ 世は良かれ

「三仕切」吉野の桜 北野の梅よ 関よい越えては 皆参る

*川東地区太鼓踊り保存会

「一仕切」向かえの土手に 鳴くスズ虫は 嬉しさに鳴くか 悲しさに鳴くか

「二仕切」山がらが山が狭いと 里に出る 里でさされて 山恋し

「三仕切」吉野の桜 北野の梅よ 関よい越えて 皆参る

*下久徳地区太鼓踊り保存会

「一仕切」向かえの土手に 鳴くスズ虫は 嬉しさに鳴くか 悲しさに鳴くか

「二仕切」愛宕参りに 袖を引かれ 袖を引かれて おもしろや

「三仕切」吉野の桜 北野の梅は 如何なる殿の 招宴に参る

【雨乞踊り】

長い日照りで水不足が起こった時に踊るもので、庭踊りの各仕切の前に雷太鼓を入れる。鉦と太鼓を同時に激しく打ち鳴らしながら庭回りをする。

《蒲生の沿革》

蒲生の名が史料上に現れたのは、今から一二〇〇年前、『日本後紀』の桓武天皇・延暦二三年（八〇四）三月の条に「大隅国桑原郡蒲生駅と薩摩郡田尻駅に相距る、遙かに遠し」と記されているのが最古である。当時、大隅（国分市）と薩摩（川内市）の両国府を結ぶ駅路上の拠点であり、一公駅として駅馬五疋が置かれていた。その当時は「蒲生院」と呼ばれ、地方行政の中心として栄えたものと思われる。

保安四年（一一二三）、藤原氏を名乗る上総介舜清が宇佐八幡から下向して蒲生の地を支配し、同時に蒲生城の築城、蒲生八幡神社の建立を行い、以後は蒲生氏の領有として約四三〇年の時を経た。しかし弘治三年（一五五七）島津氏に敗れ、蒲生家は滅亡し島津氏の直轄地として明治維新まで続いた。

明治二二年（一八九〇）四月、市制及び町村制の施行により一町八ヶ村の名称を廃して蒲生村となり、その後、昭和三年（一九二八）十一月、町制を施行して蒲生町となる。そして、平成二十二年（二〇一〇）三月二十三日、旧加治木・始良・蒲生町の三町合併により始良市となり今日に至っている。

鹿児島県のほぼ中央部に位置する始良市の最西部に蒲生地区があり、西端部は薩摩川内市、南端部は鹿児島市に接している。市総人口約七万五千人のうち約一割にあたる七千人余が居住する。

蒲生の街並みは、二つの河川に挟まれる形で主要路線沿いに形成されているが、市街地には、薩摩古流の兵法に基づく町割「蒲生籠」が残る。これは地頭仮屋（現・蒲生総合支所）を中心に八つの馬場と三つの小路からなる鍵折型格村である。

安永三年（一七七四）の衆中高帳によると、当時の武家屋敷は五六九戸を数えているが、今日その面影を残す武家門は約四十棟に減少している。なお、蒲生籠が成立された年代は古文獻等でも確定できないが、今から約四〇〇年前にあたる、慶長く寛永時代の頃と想定されている。

◇国指定特別天然記念物「蒲生のクス」

樹齢約一五〇〇年、樹高三〇呎、根回り三三呎目通り幹囲み二四呎、空洞内部直径四・五呎昭和六十三年度に環境庁が実施した「巨樹・巨木林調査」により日本一の巨樹と認定された。



日本一の巨樹「蒲生のクス」

（発行）始良市教育委員会社会教育課文化財係

鹿児島県始良市加治木町本町二五三番地

（〇九五五六二二二一）